



第3号
令和8年6月30日
庄和すずらん幼稚園
園長 戸田 千里

★ 空気を読む

紫陽花の花が美しく咲き乱れる6月、例年よりも早い時期に台風の発生があり、各地域で甚大な被害が報告されていました。紫陽花が美しく映えるくらいの雨であれば歓迎となるのですが、極端な降雨は生活に様々な影響を及ぼし、「ちょうどよい」が心地いいのだと改めて気づかされます。

先日6月20日は、前理事長・園長であられました「森田博」先生の一周忌でした。突然天国に召された一年前から今日まで、きっとあちらの世界から、子ども達・保護者の皆様・職員達を見守り続けてくださっていたことでしょう。そしてそれは、これからも変わらずに続いていくことでしょう！そんな森田先生が生前によくおっしゃっていた言葉が「人はちょうどよいが一番だね。」でした。特に6月に森田先生のことを思い出すのは、今日6月30日が森田先生の誕生日ということもあります。ご存命ならば76歳です。紫陽花の花を愛でるとき、片隅に思い出していただけると幸いです。

さて、去る6月11日には年長組対象に「お茶会」が行われました。春日部市在住のお茶の先生とそのお弟子さんたちが、園に来てくださり、パレットのさくらといちょうの部屋がお茶室に変身！畳のカーペットの上に「正座」をして、お茶の先生からのお話を聞きます。茶釜や茶せんや茶器、そして抹茶の粉の実物を見た子ども達からの素朴な質問にも、真摯に答えてくださいました。大変上品な語り口の先生のお話から、お茶会の「空気感」が伝わります。抹茶の味そのものは、子ども達それぞれの味覚により感想もまちまちです。礼儀や作法を学ぶことは、わずかな時間の中では難しい事です。ですが「空気感」というものを感じ取る感性が育まれることは、幼稚園生活の中でも大切にしたいことのひとつと言えるでしょう。空気を読むというのは、集団の中の一人となって培われていくものかとも思います。

クラスの中で、先生が前に立って話を始めようとするとき、おしゃべりをしていても静かにする、避難訓練のとき緊迫感をもって行動する、大人が真剣な表情の時にふざけない等々。自分のことで精いっぱいな年少組の時代から、少しずつ周りが見えてきて折り合いをつけることを学ぶ年中組、そしてさらに視野が広がり、大きな集団の中の一員であることも自覚する年長組と発達に応じて空気を読む力もついてくるとと思います。そしてその一助となるのが、私達の役目でもあります。ですが、それだけではないのかもしれない。

こんな話を耳にしました。お茶会に参加した女兒が、あんこが苦手な配られた茶菓子を半泣きで食べたとのこと。それを聞いたお母さまが『先生、食べられません。』って言えば良かったのに」と言うと、その女兒は「だって、そういう雰囲気じゃなかったから」と返したそうです。空気を讀んだのですね！この後素晴らしいのは、そのお母さまが「そうやって、空気を讀めるくらいまで成長したんだね」と認められたということ。お子さんの成長を保護者の方々と共に喜び、共に認め合うことでさらにお子さんの感性が磨かれていくということを、教えていただきました。「できる・できない」という目に見えやすい事象だけが成長の尺度ではないのですね。目には見えないお子さんの成長も感じてみませんか？